

研究プロジェクト総合報告
研究プロジェクト論文

Vision 150を指針とする 共通英語教育開発のための基礎研究：

国際語としての英語を学ぶための学習者方略の構造

¹若本夏美 ¹今井由美子

¹同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・教授

The Structure of Learner Strategies for Learning English as an International Language:

For the development of English courses
for non-English major students to realize Vision 150

¹WAKAMOTO Natsumi ¹IMAI Yumiko

¹Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

Abstract

The entrance examination for the university or college does not terminate English learning but instead initiates new learning to develop English proficiency to use English as a global lingua franca. This study explores the structure of college students' strategies for learning English in college. The participants in this study were 1235 college freshmen from a variety of majors. We administered a questionnaire of 70 items adopted from the reliable questionnaire, to which items related to the Internet use were added. Exploratory factor analysis and Pearson product-moment correlation were used for analysis. As a result, all the 70 items were loaded into eight factors extracted by the exploratory factor analysis. Besides traditional factors such as social strategies, interesting factors such as rote memory strategies or strategies developed in Japanese English classes were unveiled. The relationship between the eight factors, learner strategies, the TOEIC scores was examined and discussed. Implications for improving the English ability of college students and developing a course curriculum are provided.

1 研究の背景

1.1 ネイティブの英語 vs 国際語としての英語

日本における英語学習の目的は2つに大別される。1つにはKachru (1997) のモデル (Inner Circle, Outer Circle, Expanding Circle) に象徴されるように、英語使用においてイギリス、アメリカ、オーストラリアなどの英語母語話者になるべく近づこうとするもの。これは伝統的な英語教授・学習観とでも言うべきもので、21世紀の現在においてなお英語教師・学習者のみならず日本社会にも根強く残っているものである。

一方、EMI (English-Mediated Instruction) や All in English の英語授業が提唱される現在、英語を国際語 (English as a global lingua franca: EGLF, Rose & Galloway, 2018) として学び活用することを目的とするものがある。前者のモデルでは英語の母語話者が常に最良の教師であるという幻想を与えるだけでなく (グラッドル, 1999)、英語学習に何年ももの時間を費やしてもネイティブ・スピーカーのようにはなれなかった、英語を「ペラペラと」話すことができなかったというコンプレックスと敗北感を日本人に与えるなど負の側面を伴ってきた。興味深いのは日本国内で英語を学んだ学習者には前者の学習観が多いのに対し、留学や外国にある一定の期間居住したことのある者には、後者のリングフランカとしての英語という学習観を持つものが多い傾向にあることである。それは世界においては、非母語話者が英語をコミュニケーションの手段として日常生活で使っている姿を目撃するからであり、彼らがネイティブ・スピーカーのように英語を話していないからである。

同志社女子大学 Vision 150においては「学修するコミュニティ」の構築の一環として国際的視野を養う教育プログラムの展開、特に「外国語教育科目改革」が謳われている。この改革の中では当然、英語を学習する目的及び目指すべき英語モデルに関わる議論が必要となる。日

本の英語教育政策を担う文部科学省は10年に一度の学習指導要領の改訂には熱心であるが、何のために、どのような英語をとといういわば英語学習の「魂」に当たる議論を放棄しているだけに、高等教育機関である大学が独自にこの議論もすすめる必要がある。

1.2 英語の学び方

英語学習目的論・モデルと併せ重要となるのが英語をどのように学ぶのかという英語学習方法論である。中高においてもそうであるが、英語圏で学ぶことと比較すると大学の英語の授業だけではインプット・アウトプットの量が不足している。だからといって、CALL 教材など自主学习プログラムに「丸投げ」しても大学生が英語学習に活用することはそれほど期待できない。重要なのは、学習者はどのように英語を学んでいるのか、という点についての深い理解に基づく学習プログラムの策定である。

Learner Strategies (学習者方略、以下、LSs、方略、ストラテジー) についての研究はそのような要請に応える形で1970年代半ばから、英語教授法という理論と実践の橋渡しという形で理論構築がなされてきた。第一の研究パラダイム (1970年代半ばから1990年代) においては成功した学習者のストラテジーを明らかにしようとし、第二のパラダイム (1990年代から2010年代) においては年齢・性別・学習スタイルといった学習者の特徴と方略の関連性に焦点がおかれた。ストラテジーなどはそもそも存在せず、学習に対する自己調整に統合するべきであるという心理学派からの批判 (Dörnyei, 2005など) を受け、現在 (2010年以降) は第三の研究パラダイムとして自己調整も組み入れる形で方略研究が進められている。

スポットライトの当てられる部分には違いこそあれ、共通しているのは「学習者は一体何をしているのか」という原初的な問いである。これは「教えていることと学習者が学んでいることは必ずしも同じではない」という知見に基づく。教師としてはそう願いたい、残念ながら

教師が期待するように行動し学ぶ学生はそれほど多くない。別の言い方をすれば、教師の指導のもとに学習・文化環境に影響されながら、学生は各自のこれまでの経験（成功失敗）・信念・習慣などにもとづき独自の学習をしている。

その意味においては大学生がどのように英語を学んでいるのかを知ることは大学の英語の授業だけでなく、同志社女子大学が掲げる Vision 150の達成にも貢献するところが大きいであろう。本研究では、同志社女子大学1年次生全11学科に対する質問紙調査をもとに、どのような英語学習方略の構造があるのかを探求するものである。

本研究課題（Research Question）は、以下2点である。

- (1) 同志社女子大学1年次生の学習者方略にはどのような構造があるのか。
- (2) 学習者方略の構造間にはどのような関連性があるのか。

2 方法

2.1 参加者

本研究参加者は以下の通りである。同志社女子大学の全11学科の1年次学生である。

2.2 調査方法

本データは飯田他（2018）と共通データであり、2018年1月5日より25日の3週間にわたり、同志社女子大学、京田辺・今出川両キャンパスの「英語講読演習 I B」の講義前後15分程度を利用して、研究プロジェクトのメンバー又は委託を受けた大学院生の監督のもと実施した。実施にあたっては、担当者及びそのコース受講者に研究の趣旨を説明し、それぞれ同意を得た者を対象に、無記名、コースの成績に関係のないこと、どの時点においても研究からの撤退が保障されることが説明された。同意を得た者に関しては前年11月に全学で実施された TOEIC（L&R）スコアの提供も求めた。

質問紙は英語英文学科学生に対しては63項目からなる Revised SILL（Wakamoto, 2009）及び他学科学生に関しては Revised SILL をもとに ICT セクションを追加した、70項目からなる英語学習方法についての調査用紙（English 2020, 2018）を利用した。分析には同志社女子大学で提供されている SPSS Version 26.0（IBM, 2019）を利用した。因子分析においては英語英文学科学生に関しては他学科と同じ質問紙を利用していないため分析から除外した。

表1 参加者（学科別）

学科	人	%
音楽学科	174	14.1
情報メディア学科（メディア創造学科）	96	7.8
国際教養学科	90	7.3
社会システム学科	161	13.0
現代こども学科	38	3.1
医療薬学科	117	9.5
看護学科	86	7.0
英語英文学科	164	13.3
日本語日本文学科	110	8.9
人間生活学科	91	7.4
食物栄養科学科	108	8.7
合計	1235	100.0

3 結果

学習者方略の構造を考察するため、全70項目に関して探索的因子分析を、スクリープロット(図1)に基づき8因子抽出、最尤法(Maximum Likelihood)、プロマックス回転という条件でおこなった。因子得点を0.25以上に設定することにより、全70項目が8因子に分類された。

8因子による累積寄与率は48.2%であり、その結果、各因子は次のようにまとめられる(表2)。因子パターンマトリックスは資料1に掲載した。

第1因子(Factor 1)には19項目が含まれ、英語が話される授業外活動への参加(Q17)、普段の生活の中で、英語でものを考える(Q21)、英語で日記を書く(Q52)など機能的に英語を使う方略であるため「英語を実際に使用する方略」と呼称する。第2因子(Factor 2)には8項目が含まれ、何度も書いて(Q5)口に出して(Q4)見て(Q8)、単語集を使って新しい語彙を覚えるなど機械的の反復練習(rota-memory)方略であるため「日本人の好む記憶方略」と命名する。第3因子(Factor 3)には12項目が含まれ、自分の英語の間違い

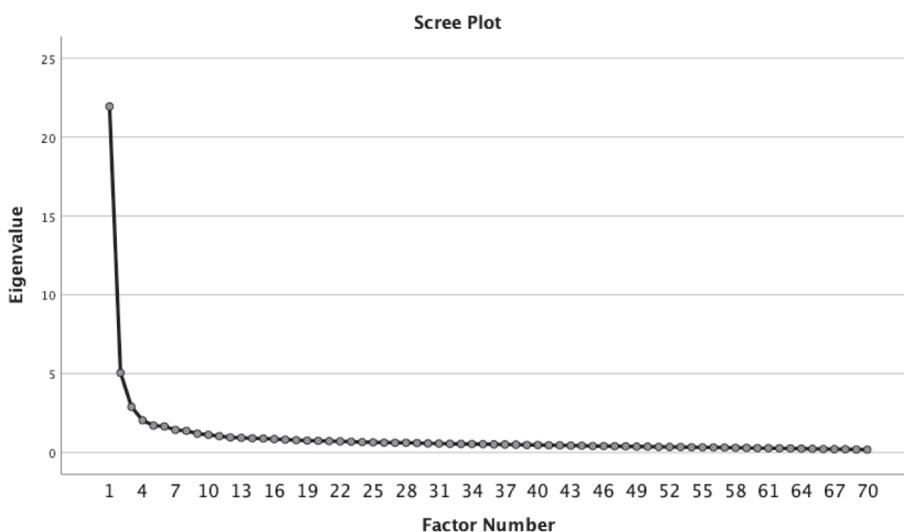


図1 スクリープロット

表2 因子項目

因子	学習者方略	項目数	代表的質問項目	累積寄与率
Factor 1	英語を実際に使用する方略	19項目	英語が話される授業外の活動に参加する(Q17)	30.6%
Factor 2	日本人の好む記憶方略	8項目	何度も口に出して語彙を覚える(Q5)	6.5%
Factor 3	日本の学校で習得した方略	12項目	自分の英語の間違いを今後の学習に生かす(Q41)	3.3%
Factor 4	社会的コミュニケーション補償方略	9項目	英語が分からない時にはもう一度言うように頼む(Q56)	2.2%
Factor 5	個人内コミュニケーション補償方略	5項目	前後関係から意味を類推する(Q26)	1.6%
Factor 6	社会的方略	7項目	友達と一緒に英語を勉強する(Q58)	1.6%
Factor 7	ICT利用方略	5項目	YouTubeで英語の海外ドラマ演説などを見る(Q67)	1.2%
Factor 8	オーラル方略	5項目	単語や文の発音練習をする(Q10)	1.1%

を今後の学習に生かす (Q41)、文型・構文等のパターンを利用する (Q22)、英語学習達成のための目標設定をする (Q49) など日本の中高等学校での英語学習を通して身につけた方略であるため「日本の学校で習得した方略」と呼称する。第4因子 (Factor 4) には9項目が含まれ、英語がわからない時にはもう一度言うように頼む (Q56)、思う単語や表現が出てこない時には、“Let me see” などといて時間をかせぐ (Q34) など話す相手と交渉してコミュニケーションが途絶えることを防ぐ方略であるため「社会的コミュニケーション補償方略」と命名する。第5因子 (Factor 5) には5項目が含まれ、前後関係などから意味を類推する (Q26)、ジェスチャーで代用する (Q24)、同義語や別表現で代用する (Q27) など第4因子と同様コミュニケーションを維持する方略であるが相手と交渉することなく自己完結型方略であるため「個人内コミュニケーション補償方略」と呼称する。第6因子 (Factor 6) には7項目が含まれ、ネイティブ・スピーカーにヘルプを求める (Q59)、英語を友達と一緒に学習する (Q58) など他者を巻き込む方略であるため「社会的方略」と命名する。第7因子 (Factor 7) には5項目が含まれ、YouTubeで英語の海外ドラマや演説等を見る (Q67)、インターネットで英語のニュースを読んだり聞いたりする (Q68) などインターネットや映画を使う方略であるため「ICT (Information Communication

and Technology) 方略」と呼称する。第8因子 (Factor 8) には5項目が含まれ、英語のネイティブ・スピーカーのように話す (Q13)、できるだけ英語を聞く機会をもつ (Q40)、発音練習をする (Q10) など聞く・話すことに特化した練習方略であるため「オーラル方略」と命名する。

次に各因子間の関係を検討する。探索的因子分析における因子得点についてまずKolmogorov-Smirnovテストにより因子得点の正規性を検討した (表3)。

すべて有意であるが、棄却限界 (critical value) は最大のFactor 1の因子得点においても小さく、サンプル数が多いために (df) 正規性の帰無仮説が棄却されているように考えられる。事実、Q-Q plotを精査すると大幅な逸脱は見られない (図2)。

表3 Kolmogorov-Smirnov テスト

因子得点	Statistic	df	Sig.
Factor 1	0.169	900	.000
Factor 2	0.055	900	.000
Factor 3	0.052	900	.000
Factor 4	0.066	900	.000
Factor 5	0.029	900	.069
Factor 6	0.072	900	.000
Factor 7	0.069	900	.000
Factor 8	0.089	900	.000

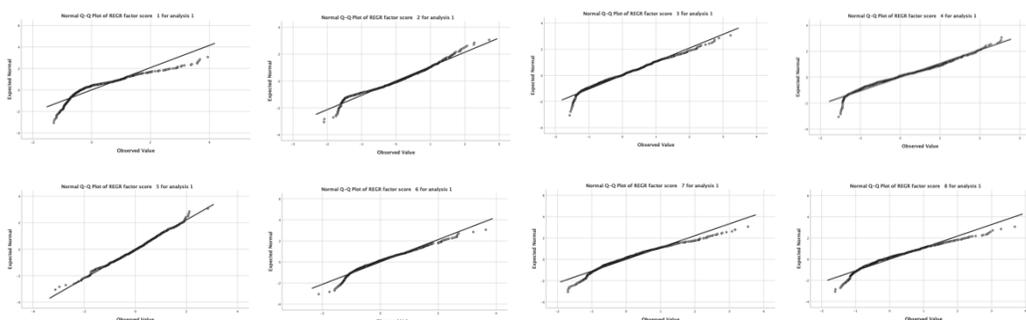


図2 Factor 1 – 8までの因子得点のQ-Q Plot

以上の考察から正規性を想定し、因子間のピアソン積率相関係数 (Pearson product-moment correlation) を算出した。

Factor 3 (日本の中等高等学校で習得した方略) は最も多くの因子と関係が深く、Factor 2 (日本人の好む記憶方略) や特に Factor 4 (社会的コミュニケーション補償方略) や Factor 6 (社会的方略)、Factor 8 (オーラル方略) と関係

が強い。Factor 7 (ICT 利用方略) は Factor 6 (社会的方略) と関係が強いが、Factor 1 (英語を実際に使用する方略) や Factor 5 (個人内コミュニケーション補償方略) にはそれほど関係の強い因子は発見されなかった。以上の関係を図3に示す。各因子の円の領域の大きさは累積寄与率に比例し、関係線は相関係数が $r = .50$ 以上のものを選択し (Factor 5 はその基

表4 因子間の相関係数

Factor	1	2	3	4	5	6	7	8
F1 英語を実際に使用する方略	—	.248**	.548**	.505**	-0.011	.509**	.550**	.579**
F2 日本人の好む記憶方略	.248**	—	.587**	.506**	.321**	.361**	.279**	.450**
F3 日本の学校で習得した方略	.548**	.587**	—	.624**	.181**	.709**	.571**	.718**
F4 コミュニケーション社会的補償方略	.505**	.506**	.624**	—	.437**	.702**	.502**	.624**
F5 コミュニケーション個人内補償方略	-0.011	.321**	.181**	.437**	—	.189**	.079*	.280**
F6 社会的方略	.509**	.361**	.709**	.702**	.189**	—	.615**	.709**
F7 ICT利用方略	.550**	.279**	.571**	.502**	.079*	.615**	—	.553**
F8 オーラル方略	.579**	.450**	.718**	.624**	.280**	.709**	.553**	—

Note. $N = 900$

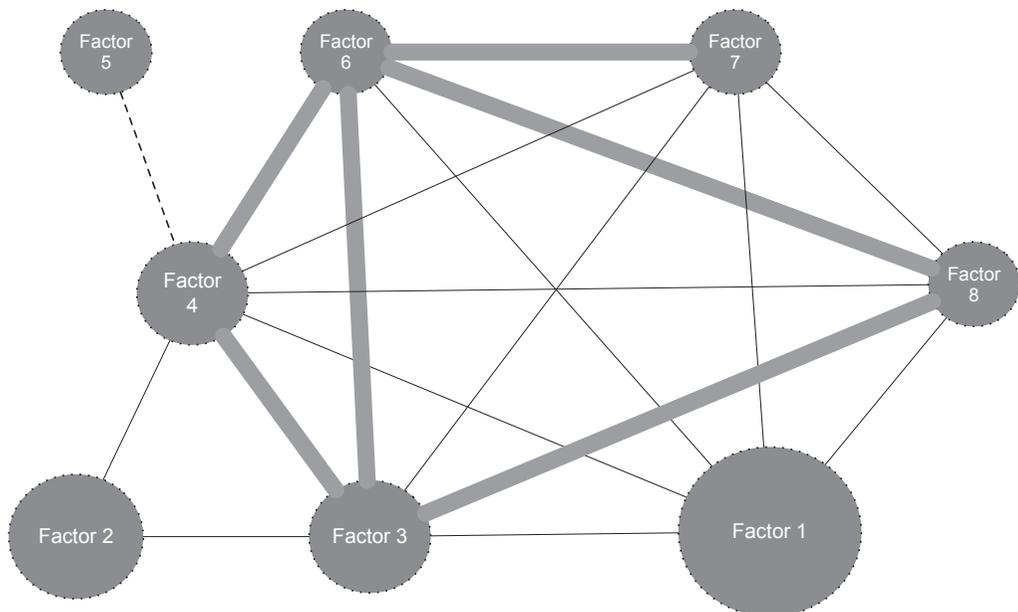


図3 因子間の関係

準のものがなかったため例外的に $r = .40$ のものを点線で示す)、 $r = .60$ を超えるものについては太線で示した。

日本の中等高等学校で習得した方略である Factor 3 と社会的方略である Factor 6 はその累積寄与率は大きくないものの、方略の中心にある。発音練習などの音声練習方略である Factor 8 は中高の英語の授業の影響とも考えられるため、この2つの方略は学校で身につけた方略または大学入学までの学習者方略と考えてよいだろう。また、特に Factor 3 と 6 間の相関係数が高いことは、これまでに身につけた方略に友達と一緒に学ぶなどの社会的方略を大学の英語学習の中で同時に使っている可能性を示している。

最後に TOEIC スコア (Reading, Listening) との関連性を検討する。

TOEIC スコアの記述統計は以下の通りである。

提供は任意であったため、分析に際してはこの TOEIC スコアは参加者全体を反映していないことに留意した。因子間の場合と同様の手順でピアソン積率相関係数 (Pearson product-moment correlation) を算出した。

参加者が多いため多くの因子においてその有意性が確認されるが、相関係数は一般的に高くない。その中で、TOEIC Reading スコアにおいては Factor 3 と 8 が中程度の強さの相関、Listening スコアにおいては Factor 3、6、8 が、Total スコアにおいては Factor 3、4、6、8 が同様に中程度の強さの相関を示している (Cohen, 1988)。相関係数は因果関係を含意しないため、スコアの高い学習者が方略を使っているのか、方略を利用することによってスコアが高くなったのかについては留保する必要がある。

表5 TOEIC スコアの記述統計

	<i>N</i>	Min.	Max.	<i>M</i>	<i>SD</i>
TOEICReading	553	15	425	192.82	66.2
TOEICListening	553	75	460	201.72	64.5
TOEICTotal	663	75	770	389.71	106.0

Note. *N* = 663

表6 学習者方略の因子と TOEIC スコアの相関関係

Factor	Reading	Listening	Total
F1 英語を実際に使用する方略	.183**	.036	.079
F2 日本人の好む記憶方略	.159**	.173**	.182**
F3 日本の学校で習得した方略	.311**	.290**	.342**
F4 コミュニケーション社会的補償方略	.198**	.163**	.214**
F5 コミュニケーション個人内補償方略	.091*	.149**	.158**
F6 社会的方略	.174**	.206**	.214**
F7 ICT利用方略	.196**	.149**	.156**
F8 オーラル方略	.310**	.296**	.332**

Note. *N* = 663

4 考察と結論

4.1 研究課題1についての議論

結果をもとに研究課題について議論する。

研究課題1：同志社女子大学1年次生の学習者方略にはどのような構造があるのか。

探索的因子分析により70項目の質問紙項目が8つの因子に分類された。最も多くの累積寄与率が集積したのは英語を実際に使いながら英語能力を向上させる機能的英語使用方略であった(第1因子)。英語学習目的がネイティブ・スピーカーを目指すのであれ、リンガフランカとしての英語の習得であれ、21世紀の現在、英語使用は従来の枠組みで分類されるところの外国語環境下(English as a foreign language)にあろうが、英語使用は不可避であることの反映であらうと考えられる。一方、第2、第3因子に日本人特有の方略構造が露呈したのは興味深い。記憶方略では日本のみならずアジア圏の英語学習者が好む(例えば、Lai, 2009) 機械的暗記方略(Rote-Memory Strategy)が特徴的である。また、文法構造や誤りをもとに修正しながら学習をすすめるという日本の大学入試や中高の英語の授業の影響と考えられる方略が12項目第3因子に集約されている。北米での方略の枠組みとはこの部分において大きく異なっており、同プロジェクト報告で今井もこの点について議論している。

この質問紙のもととなっている SILL (Strategy Inventory for Language Learning) やその開発者の Rebecca Oxford の一連の研究では、認知的 (Cognitive)、メタ認知的 (Metacognitive) ストラテジーが出現するところであるが、恐らくこの第3因子に認知・メタ認知ストラテジーが異なった組み合わせで構造化されたのであろう。これは、大学入学後もなお、これまでの英語学習方法に変化はなく、それまでの方略が学習者に継続利用されている可能性を示している。また、興味深いのは、SILL においてはコミュニケーション補償方略としてひとつのカ

テゴリーであるところが、第4因子では他者との関係性の中で利用するもの、第5因子では英語の表現が分からない際に類義語を使うなど学習者個人の努力で活用する事のできる方略と、二分されている点である。これは、分からないことを人に尋ねることを良しとせず、質問することを苦にする日本人英語学習の特徴を反映したものかも知れない。第7因子でインターネットなどを利用する ICT 方略が出現しているが、インターネットの普及が一層進んだ現在と調査をした3年前と比較すると、この因子に含まれる方略は今後よりその重要度を増す可能性が高い。

4.2 研究課題2についての議論

研究課題2：また、その構造間にはどのような関連性があるのか。

8因子間の相関関係からはいくつかの可能性を想定することができる。累積寄与率が最も高く含まれる項目数が最も多い因子である第1因子は通常であれば最も多くの他因子と関係性があると考えられるが、実際には最も多く他の因子と関係が見られたのは第3、8因子であった。また、TOEIC スコアとの相関関係においても第8因子と並んで最も関係が深かったのも第3因子であり、第1因子は TOEIC スコアとはほとんど関係がなかった。

これは、英語を実際に使うという第1因子の方略に対するこのプロジェクト参加者の低い認識を示している。言いかえるなら、大学に入学してからもこれまでと同様の方略を使って英語学習に取り組んでいる可能性がある。また、第2因子の日本人の好む機械的暗記方略が TOEIC スコアと低い相関であることは、語彙学習に時間も労力もほとんど割いていないとも考えられる。ICT 活用の第7因子は大学生の英語学習にはほとんど影響を与えていない。

以上の点から、今回の研究に参加した大学1年次生は、高校時代からの英語学習方法をそのまま継続したまま大学の授業や大学時代の英語学習に臨んでいると要約することができよう。

調査の時期がほぼ1年次の終了時であることを考えるならば、大学での英語の授業を受講しても、学習者の学習方略に対する認識に何ら肯定的な影響を与えていないことを示唆している。大学に入学後も大学入試までの英語学習に対するマインドセットが変わっていないのである。もちろん、因子構造として英語を利用する方略（第1因子）やICT活用（第7因子）など光明も見える。

大学の英語学習で重要なのは、これまでの英語学習を振り返り、大学入試とは異なる各学科、専攻に適した目標設定をし（メタ認知）、語彙を強化したり（Factor 2）英語を実際に使う機会を増やしてゆく（Factor 1）ことである。いわば英語学習に対するマインドセットの再構築である。これなしには、目的が英語の単位取得のみに矮小化され自律的に学ぶことも困難となる。

これはもちろん学習者である大学生の問題でもあるが、大学の英語の授業の中でそのような働きかけをすることが大学における英語の授業が果たすべき重要な役割であると考えられる。この点において、英語学習を学習者にいわば「丸投げ」していると大学が非難されても致し方ないところである。相関関係は因果関係を含まないためその解釈は慎重に行わなければならないが、TOEICスコアにプラスになっているとすれば、大学入学までの学習経験のみであるというの、大学英語教育の敗北であると言われても反論のしようがないかもしれない。

今後、好むと好まざるに関わらず、ノンネイティブ同士の英語によるコミュニケーションが多くなる。母語を介さないコミュニケーション（若本、2019）を乗り切るためにはこれまでの方略に加え、大学生に相応しい持続可能で最適化された方略を発見できるよう授業の中で学習者を援助してゆく事が必要となる。

同志社女子大学が掲げる Vision 150は、これまでの150年を総括し更に大学を発展させようとする崇高な理念である。かつての「英語の同志社」の復権そしてその重要な部分を占める

外国語能力向上の達成を実現するためには、英語の授業をおこなう事に加えて、何のために大学で英語を学び（専攻に応じた目的論）どのように英語を学ぶのか（方法論、方略指導）といった教員と学生との真摯な双方向のコミュニケーションを含めることが求められているのではないだろうか。

参考文献

- 飯田毅、成橋和正、橋本秀実、今井由美子、佐伯林規江、高橋玲、若本夏美、松中みどり (2018). 「本学の教育理念及び Vision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究—1年目のまとめと考察」同志社女子大学総合文化研究所紀要35巻、45-81.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the Behavioral Science (2nd edition)*. Lawrence Erlbaum Associates
- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner*. Lawrence Erlbaum Associates.
- デイビッド・グラッドル (1999). 「英語の未来」. 研究社.
- Kachru, B. (1997). World Englishes and English-using communities. *Annual Review of Applied Linguistics*, 17, 66-87.
- Lai, Y.-C. (2009). Language learning strategy and English proficiency of university freshmen in Taiwan. *TESOL Quarterly*, 43 (June), 255-280.
- Rose, H., & Galloway, N. (2019). *Global Englishes for language teaching*. Cambridge University Press.
- Wakamoto, N. (2009). *Extroversion/introversion in foreign language learning: interactions with learner strategy use*. Peter Lang.
- 若本夏美 (2019). リスニング・ストラテジーの指導は有効か？ All in English 授業における理解促進の観点から. Vol.68 No.3 「英語教育」(6月号) 22-23.

資料1 因子パターンマトリックス

	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Factor 4	Factor 5	Factor 6	Factor 7	Factor 8
Q17	.72	-.03	-.04	-.07	.05	.07	-.01	.01
Q21	.71	-.08	.00	.03	.02	.04	-.14	-.12
Q52	.64	.03	.03	.07	-.14	.15	.02	-.15
Q16	.64	-.05	.00	-.02	.06	-.21	.37	.04
Q6	.62	.16	-.12	.02	.05	-.01	-.10	.21
Q7	.60	.30	-.17	.04	-.04	-.14	-.06	.15
Q69	.59	.02	-.03	-.08	-.03	.21	.15	-.16
Q15	.58	.01	.04	-.14	.10	-.05	.26	.09
Q18	.57	-.05	-.06	.01	.14	.04	.11	.14
Q20	.53	-.02	.01	-.05	.16	.02	.31	.02
Q14	.51	.05	.15	.01	.09	-.05	-.09	.19
Q38	.51	-.14	.00	-.05	-.05	.27	-.09	.27
Q53	.42	-.05	.18	.07	-.05	.25	-.08	.05
Q70	.38	-.02	.21	.01	-.06	.19	.01	-.12
Q37	.38	-.05	.25	-.04	.03	-.05	.11	.30
Q31	.38	-.02	.06	.15	.26	.10	-.03	-.17
Q65	.35	.16	-.04	-.03	-.08	.20	.20	-.01
Q28	.34	-.07	.04	.03	.25	.03	-.05	-.05
Q29	.31	.02	-.07	.12	.25	.24	.04	-.07
Q5	.00	.81	-.22	.02	.01	.06	-.08	.28
Q4	-.06	.72	-.05	-.11	.05	.18	-.05	-.08
Q8	-.04	.57	.19	-.07	.22	.06	-.08	-.02
Q2	-.03	.56	.11	-.01	-.08	.04	.10	-.03
Q12	.19	.49	-.16	.03	.01	-.08	.02	.41
Q1	.07	.45	.13	.01	-.09	-.02	.02	-.01
Q9	.09	.39	.28	-.01	.32	-.14	-.03	.01
Q3	.13	.32	.30	.07	.17	-.09	-.04	-.03
Q41	-.01	-.07	.78	.00	.25	.11	-.12	.01
Q42	.02	-.10	.76	-.02	.14	.10	-.16	.06
Q22	.09	.07	.72	-.02	.22	-.17	-.16	-.09
Q23	.00	.04	.70	.04	.22	-.18	-.05	-.12
Q49	.18	.09	.46	.14	-.26	-.01	.04	.07
Q48	.12	.20	.44	.10	-.19	-.09	.03	.00
Q44	.27	.06	.43	-.01	-.21	.00	.01	.22
Q45	.01	.19	.42	-.10	.03	.23	-.10	-.05
Q47	-.05	.08	.40	.04	-.05	.20	.08	.23
Q19	-.21	.25	.34	-.03	.21	.18	-.02	-.08
Q43	.25	-.07	.33	-.04	-.10	.17	.01	.25
Q50	.29	.11	.32	.08	-.22	.01	.01	-.06
Q56	-.18	.00	-.06	.78	.07	.17	.07	-.02
Q55	-.16	.03	-.03	.77	.02	.12	.06	-.02
Q34	.13	-.06	.12	.73	.03	-.29	-.01	-.03
Q32	.02	-.02	-.04	.59	.25	-.06	.03	.03
Q35	-.05	-.06	.00	.57	.17	.02	.00	.13
Q57	.24	-.08	-.01	.56	-.04	.24	-.05	-.10
Q36	.14	-.05	.12	.52	.11	-.11	-.03	.06
Q33	-.01	.09	.06	.31	.26	.08	-.06	-.30
Q51	.18	-.01	-.05	.28	-.01	.25	.03	.11
Q26	-.09	.04	.10	.03	.58	.09	.16	-.12
Q27	-.17	.02	.17	.06	.54	.06	.16	.17
Q24	-.13	.04	-.05	.13	.45	.15	.16	.12
Q25	.17	-.05	.22	.01	.41	.08	.02	.09
Q30	.17	.05	-.01	.06	.33	.08	.01	-.13
Q59	.38	-.05	-.17	.02	.10	.77	-.14	-.04
Q58	.21	.06	-.02	-.10	.05	.64	-.05	-.08
Q61	.01	.16	.11	.05	.10	.60	-.04	-.14
Q60	.37	-.03	-.06	-.01	.01	.58	-.12	.14
Q63	.05	.02	.03	.00	.19	.37	.26	.09
Q54	-.17	.05	.16	.12	.17	.37	.07	.06
Q62	.03	.03	.19	.06	.20	.36	.11	.01
Q67	.13	-.04	-.16	.02	.12	.00	.66	.07
Q11	.19	-.10	-.24	.09	.13	-.18	.60	.17
Q68	.45	-.03	.10	-.09	.02	-.04	.56	-.18
Q66	.31	.04	-.06	.14	-.06	.12	.33	-.17
Q64	-.05	.27	-.12	-.04	.08	.26	.30	.03
Q13	.24	.06	-.07	.14	.14	-.07	.02	.50
Q40	.26	-.12	.13	-.09	.07	.05	.17	.46
Q10	.12	.32	.05	.06	.06	-.05	-.03	.38
Q39	.36	-.07	.27	-.13	-.06	.12	-.07	.38
Q46	-.04	.09	.28	.03	-.11	.11	.16	.35